

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2011～2014

課題番号：23242048

研究課題名(和文) 21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信

研究課題名(英文) The Kofun Period in the Early 21st Century: Toward a Comprehensive Overview and its Internationalization

研究代表者

福永 伸哉 (FUKUNAGA, SHINYA)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：50189958

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 25,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、百年以上にわたって日本考古学が蓄積してきた古墳時代研究の到達点を整理し、古墳時代は、日本列島(北海道を除く)の諸集団がある程度の地域的自立性を残しながらも統一的な政体を形成し、近畿中部の政治権力を最上位とする社会政治秩序を維持するために、墳丘墓築造という行為を最大限に利用した初期国家段階の社会であったと結論づけた。そして、そうした古墳時代歴史像の理解を、海外のワークショップでの発表、英語と日本語による論文集作成などを通じて国際的に発信した。

研究成果の概要(英文)：The authors synthesized the comprehensive results of over one hundred years of Kofun-Period research and concluded that the Kofun Period can most appropriately be characterized as an Early-State society in which, while a certain level of regional autonomy remained, unified political control was achieved over the Japanese archipelago (excluding Hokkaido and Okinawa). The paramount central Kinki power deftly utilized monumental mounded tomb building to maintain its sociopolitical hierarchy. Additionally, the authors disseminated this understanding on a global scale through presentations at overseas workshops and collections of papers in both English and Japanese.

研究分野：考古学

キーワード：古墳時代 墳丘墓 威信財 地域関係 社会構造 国家形成 国際比較 国際情報交換

1. 研究開始当初の背景

歴史研究としての古墳時代研究の大きな基礎を築いたのは、戦後間もない1950年代に画期的な研究を相次いで発表した小林行雄氏であった。小林氏は銅鏡や碧玉製腕飾類などの考古資料を駆使して、古墳が出現して日本列島に波及していく動きを大和政権の勢力伸長過程と明確に評価した(小林1955「古墳の発生の歴史的意義」)。

その後も、古墳の形と規模が大和政権による「国家的身分秩序」の表示であることを指摘した西嶋定生氏による1960年代の研究(西嶋1961「古墳と大和政権」)、弥生墳丘墓から前方後円墳に至る過程を追求する中で前方後円墳成立の画期性を提示した1970～80年代の近藤義郎氏の研究(近藤1983『前方後円墳の時代』など)、古墳時代社会を「前方後円墳体制」ととらえて国際的な視野に立って「初期国家論」を提起した1990年代の都出比呂志氏の研究(都出1991「日本古代の国家形成論序説 前方後円墳体制の提唱」)などのように、各世代の研究者が体系的な古墳時代歴史像を提起し、賛否双方の議論を巻き起こしながら研究の牽引役となってきた。

しかし、おもに1990年代以降の発掘調査の進展によって、以下のような点で従来の古墳時代像に再検討を迫る新たな資料や研究の状況が明瞭になってきた。

(1) 前方後円墳は東北南部から九州南部にまでほぼ同時に出現すること、したがって、古墳の段階的波及が「大和政権」の地域支配過程を示すという単純な図式の再検討が必要になったこと。

(2) 前方後円墳成立直前の各地の生産力や階層分化の程度は多様であり、農耕生産力の増大に基づく有力者の台頭が古墳を出現させたという理解だけでは不十分になったこと。

(3) 古墳時代史の理解において、東アジアの歴史状況との関連がいっそう重視されるようになったこと。

(4) 青銅器、鉄製品、金銅製品など威信財的器物の型式・流通についての個別研究が深まったこと。

(5) 年輪年代、放射性炭素年代の成果も含めて、古墳時代の実年代研究が進展してきたこと。

(6) 古代国家形成論の研究対象として古墳時代に対する関心が高まってきたこと。

研究代表者福永伸哉は、こうした変化の起こりつつある1980年代後半から2000年代にかけて、古墳時代政治史を解明する研究の一端に関わるなかで、地域の独自性が保持される一方で前方後円墳という共通の葬制によって倭人社会のまとまりが形成された事実を、東アジアの歴史動向をふまえながら総合的に理解する枠組みが必要であることを痛感するに至った。それとともに、豊富な資料と研究蓄積のある「古墳時代考古学」を、国家形成論研究とも連動させて世界に発信することが、今後の日本考古学の大きな課題であることも強く認識するようになった。

2. 研究の目的

上述の研究背景と問題意識をふまえて計画した本研究の目的は、(1)研究対象の細分化が著しい古墳時代研究において、その最先端の個別成果の到達点を的確に把握し、明確な研究戦略のもとに企画するフィールド調査を加えながら、21世紀初頭における総括的な古墳時代歴史像を提示すること、(2)その成果について、わが国の古墳時代研究としては初めてとなる体系的な海外発信を行うことによって、古墳時代研究の国際的認知と国際比較研究テーマへの発展をはかり、次世代の古墳時代研究の新たな道筋を切り開くことである。

3. 研究の方法

本研究は、次の4点を作業の柱として遂行する。

(1) テーマ研究

古墳時代研究の主要論点について代表者・分担者が研究史の到達点を整理分析し、今後の研究へ向けた展望を示す。作業は、以下(2)～(4)における成果や知見をフィードバックしつつ遂行する。

(2) フィールド研究

古墳築造の地域性と共通性、古墳時代の地域政治展開を解明するために東北、近畿、九州の3地域で古墳の発掘調査を行う。また、欧州、東アジアの墳丘墓遺跡の現地踏査を行い、海外の主要な墳丘墓文化との比較検討を通じて日本古墳の特質を解明する。

(3) 研究集会および研究ミーティング

テーマ研究の討論や海外研究者から研究現状を聴取するための研究集会を開催する。研究集会を授業の一環として取り扱うなどして、若手研究者の育成の場としても活用する。

(4) 国際発信

テーマ研究や比較研究の成果を国際ワークショップ開催、国際学会での発表等により国際的に発信し、古墳時代の特質の提示と古墳時代研究の国際的活性化を図る。具体的には、英国セインズベリー日本藝術研究所(2012年)、ボストン大学(2013年)、ハーバード大学(2013年)において国際ワークショップを開催し、古墳時代研究の現状を紹介して世界諸地域の研究者と比較検討の議論を行うほか、アメリカ、中国、韓国などの学会において研究発表を行う。また最終年度には、古墳時代の特質を考察した日英文併用の報告冊子を作成する。

4. 研究成果

上記の研究方法の4つの柱に応じて、研究成果を記す。

(1) テーマ研究

以下の論点について、研究史の整理にもとづく総括的な理解を提示した。もちろん研究組織全員の理解がすべての論点において一致したわけではないが、見解の相違がどこに

あるかを明確にすることは、むしろ古墳時代歴史像を追求する作業においては有効であった。

<古墳時代歴史像> 中央政権を核として、ゆるやかながら全土的階層秩序と政治秩序が形成された時代であり、古墳時代を通じて政権の地域支配が進展する。世界的にも異例な古墳の巨大性や墳形の多様性は、墳墓記念物を「統治」の手段として利用した典型的な事例であると指摘し、古墳築造の人類史上の意義を提起した。

<時期区分と年代> 古墳時代を前、中、後、終末の4期にとらえる立場が主流で、実年代の理解にはこの四半世紀の間にかなり変動があったことを整理した。

<古墳の構造と変遷> 墳丘の規模や形態、外部施設の充実度、埋葬施設の構造や棺の種類、副葬品の量や組合せは、畿内中枢部の大型古墳を頂点にした階層関係を反映しており、その内容は政権構造や国際関係に応じて変化しているとの整理を行った。

<古墳時代の土器> 土師器と須恵器の実態と研究史を整理し、古墳時代土器が持つ斉一性、更新性、中心-周辺関係という特質が国家形成期という歴史段階をよくあらわしているとの理解を示すとともに、当該期の土器にかんする国際的な比較研究の有効性を提起した。

<古墳築造の終焉> 前方後円墳消滅から古墳築造停止に至る諸段階を整理し、その要因が仏教受容や王権確立といった単一のものではなく、大化あるいはそれ以前からの薄葬基調や、国内財政、冠位による身分秩序の整備など複合的なものであったと指摘した。

<古墳文化の南北外域との関係> 外域である東北北部や南島地域との経済的な交流関係の意義を考えることによって、古墳文化とされるものの実態が明らかにできるのではないかと提言がなされた。

<対外交渉> 中期以降に活発化する朝鮮半島からの技術や人の流入が自然的な文化伝播というより、政権による先進文化の戦略的な導入という性格を持っていたことが指摘された。

<威信財> 古墳時代前期、中期、後期を代表する威信財である三角縁神獣鏡、甲冑、装飾付き環頭大刀について、図・写真を含む最新のデータベースを作成し、研究到達点の整理と向後の展望を加えて、日本古墳時代研究のリソースとして活用すべく、冊子体の資料集として刊行した。

<中央と地域の関係> 列島の前方後円墳域は、地域の独自性は存在するものの、東アジアにおいて1個の政体として認められるような地域統合を果たした社会であり、規模の異なる4形態の古墳築造が各地に展開したことは、政権と地域エリートとの関係を示しているのとらえた。

<親族構造> 古墳の被葬者となるエリート層の地位継承は、古墳時代当初は双系的な

性格が濃厚であったが、その後、王権に近い層から父系化が進行すること、その背景として、生産力の発展による内在的要因よりは、対外的要因とくに軍事という要因によって王権主導の下で父系化が進行していったことを指摘した。

<集落動向> すでに弥生時代に3層程度の集落階層が存在していたが、古墳時代にはこれに首長居館が加わることに意義を見いだすとともに、首長墳系譜と集落動向の変化が連動しているのではないかと見通しを示し、これを古墳時代の特質にとらえた。

<生産と生業> 生業の前提となる技術や鉄素材を外部導入した列島社会においては、技術・物資の流通ルートの確保が政治的なマターになりやすく、したがって東アジア情勢の影響を受けやすいという特質を持っていたという理解が提示された。

<戦争と国家形成> 世界の研究史をふまえながら、古墳時代の統一政体の形成にあたっては、戦争や征服そのものが直接の契機になったとはいえないにせよ、軍事の組織化と専門化が国家形成の進展に大きな役割を果たしたと理解した。

<古墳時代考古学の意義> 社会の成層化の度合い、古墳の多様性、中心周辺関係、東日本地域政体の一定の自立性などを総合的に検討した結果、5世紀の古墳中期に至って、初期国家レベルに達したという理解を示しつつ、古墳考古学が世界の比較考古学のテーマとして有効性を持つことを強調した。

(2) フィールド研究

日本の古墳調査としては、畿内では兵庫県長尾山古墳、大阪府待兼山古墳群、九州では熊本県カミノハナ古墳群、平原古墳群、東北では山形県菱津古墳、大師森石棺、福島県団子山古墳の発掘調査、測量調査を行った。畿内猪名川流域の首長墳系譜、列島南北での古墳築造の多様性などを明らかにした。

海外の墳丘墓調査としては、イギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン、デンマーク、韓国などの遺跡踏査と出土品調査を実施し、日本古墳の持つ巨大性や多様性と比較した。その結果、世界の墳丘墓築造を「競覇目的の墳丘墓」「統治目的の墳丘墓」の二つの性格に分けてとらえるという新たな着想を得るに至った。

(3) 研究集会および研究ミーティング

4年間の期間中に18回の研究集会を行った。テーマ研究について議論したほか、イギリス、フランス、ドイツ、デンマーク、韓国、中国などの研究者を招いて彼等の墳丘墓築造のあり方について比較検討を行った。

(4) 国際発信

2012年7月に英国セインズベリー日本藝術研究所にて、'Workshop on Current Research on the Archaeology of the Kofun period in an international perspective'、2013年10月、11月にボストン大学、ハーバード大学にて、'New Perspectives on the Archaeology

of State Formation in Japan'と題する国際ワークショップを実施し、日本の古墳時代研究の現状を紹介するとともに、海外の研究者との議論を通じて、比較考古学的な視点から古墳時代像を検討した。また研究組織メンバーが、アメリカ考古学会、漢代西域考古与漢文化国際学術研討会、大韓文化財研究所国際学術大会などでそれぞれ報告を行った。

以上のテーマ研究、国際ワークショップ、フィールド調査の成果は、2015年3月に編集刊行した最終成果報告書において日英文を併用して公表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 57 件)

福永伸哉、古墳時代と国家形成、古墳時代の考古学、査読無、9巻、(2014)、pp.7-20

杉井 健、前方後円墳体制論の再検討、古墳時代の考古学、査読無、9巻、(2014)、pp.35-49

菊地 芳朗、集落と古墳時代社会、古墳時代の考古学、査読無、9巻、(2014)、pp.21-34

佐々木憲一、北アメリカから見た古墳時代考古学、古墳時代の考古学、査読無、9巻、(2014)、pp.177-191

中久保辰夫、古墳時代原初的官僚層形成に関するノート、査読無、待兼山論叢、第48号、(2014)、pp.25-50

福永伸哉、近江の古墳時代史と雪野山古墳、査読無、古墳時代前期の王墓、(2014)、pp.6-36

杉井 健、七観古墳出土矢の構造および副葬状態の復元ならびに砂鉄時き末矧の史的意義、七観古墳の研究 - 1947年・1952年出土遺物の再検討 -、査読無、(2014)、pp.211~220

橋本達也、中期甲冑の表示する同質性と差異性 変形板短甲の意義、七観古墳の研究 - 1947年・1952年出土遺物の再検討 -、査読無、(2014)、pp.251-272

橋本達也、西都原4号地下式横穴墓の装身具、宮崎県立西都原考古博物館紀要、査読無、第10号、(2014)、pp.50-57

福永伸哉、前方後円墳の成立、岩波講座日本歴史、査読無、第1巻、(2013)、pp.169-202

高橋照彦、首長墳の被葬者像、古墳時代の考古学、査読無、第6巻、(2013)、pp.22-31

杉井 健、漆塗り製品、古墳時代の考古学、査読無、第4巻、(2013)、pp.189~202

清家 章、中小古墳の被葬者像、古墳時代の考古学、査読無、第6巻、(2013)、pp.11-22

菊地芳朗、横穴と裝飾付大刀、横穴墓の世界、査読無、(2013)、pp.31-46

菊地芳朗、骨角製品、古墳時代の考古学、査読無、第4巻、(2013)、pp.219-231

中久保辰夫、渡来系集団の定着過程と河内地域の集落展開、古代学研究、査読有、第199号、(2013)、pp.17-24

橋本達也、古墳・三国時代の板甲の系譜、技術と交流の考古学、査読無、(2013)、pp.336-347

福永伸哉、漢中期の鏡と表六甲の前期古墳、菟原、査読無、(2012)、pp.375-386

福永伸哉、副葬品、講座日本の考古学、査読無、8巻 古墳時代(下)、(2012)、pp.430-453

高橋照彦、仏教の流入と古墳文化、古墳時代の考古学、査読無、7巻、(2012)、pp.183-197

②杉井 健、古墳時代の繊維製品・皮革製品、講座日本の考古学、査読無、8巻 古墳時代(下)、(2012)、pp.197-236

②清家 章、各地の古墳 南海、古墳時代研究の現状と課題、査読無、上巻、(2012)、pp.81-97

③菊地芳朗、各地の古墳 XI 東北、古墳時代研究の現状と課題、査読無、上巻、(2012)、pp.227-247

④佐々木憲一、日本考古学の方法論 アメリカ考古学との比較から、考古学研究、査読有、第59巻第3号、(2012)、pp.23-31

⑤佐々木憲一、総合科学としてのアメリカ考古学の始まり、考古学集刊、査読有、第8号、(2012)、pp.53-71

⑥中久保辰夫、渡来人がもたらした新技術、古墳時代の考古学、査読無、7、(2012)、pp.159-169

⑦橋本達也、古墳築造周縁域における境界形成 - 南限社会と国家形成 -、考古学研究、査読有、第58巻第4号、(2012)、pp.17-31

⑧杉井 健、マロ塚古墳出現の背景、国立歴史民俗博物館研究報告、査読無、173、(2012)、pp.541-562

⑨福永伸哉、埋葬姿勢と埋葬配置、古墳時代の考古学、査読無、3巻、(2011)、pp.227-234

⑩福永伸哉、古墳時代研究と時間軸、古墳時代の考古学、査読無、1巻、(2011)、pp.1-6

⑪杉井 健、熊本県阿蘇市中通古墳群の基礎的研究1、熊本古墳研究、査読無、4、(2011)、pp.13-22

⑫清家 章、破碎副葬と葬送祭祀、古墳時代の考古学、査読無、3巻、(2011)、pp.208-215

⑬橋本達也、金銅装眉庇付冑と古墳時代中期、第79回歴博フォーラム 祇園大塚山古墳と5世紀という時代、査読無、(2011)、pp.16-21

⑭藏富士寛・橋本達也、古墳文化の地域的諸相 九州、講座日本の考古学、査読無、7巻 古墳時代(上)、(2011)、pp.127-146

⑮中久保辰夫、土器からみた渡来人と北河内の「牧」、ヒストリア、査読有、第229号、(2011)、pp.43-45

[学会発表](計 48 件)

中久保辰夫、倭系遺物の年代論、大韓文化財研究所 2014 下半期国際学術大会、2014年11月29日(招待講演) 国立羅州博物館、韓国

福永伸哉、前方後円墳と日本の国家形成 - 墳丘墓を統治手段として利用した社会 - 日仏会館創立 90 周年記念シンポジウム「考古学・文化財・アイデンティティ」, 2014 年 11 月 2 日 (招待講演) 日仏会館

佐々木憲一、国家形成過程における大室古墳群の占める位置 - 趣旨説明に代えて -、日本考古学協会第 80 回(2014 年度)総会、2014 年 5 月 18 日、日本大学文学部

SASAKI Ken'ichi, State Formation in East Peripheral Region of Japan. SYMPOSIUM STATE FORMATION IN EARLY JAPAN, The 79th Annual Meeting of the Society for American Archaeology, April 26, 2014, Texas, USA

NAKAKUBO Tatsuo, Change in Patterns of Cultural Interaction in the Early State Formation in Japan, SYMPOSIUM STATE FORMATION IN EARLY JAPAN, The 79th Annual Meeting of the Society for American Archaeology, April 26, 2014, Texas, USA

菊地芳朗、古墳時代刀剣類研究の諸問題 前期・中期を中心に、第 10 回古代武器研究会、2014 年 3 月 1 日 (招待講演) 山口大学

福永伸哉、考古学と古代史研究の架け橋 - 吉田晶氏の古代国家形成論をめぐって -、大阪歴史協 1 月例会、2014 年 1 月 25 日 (招待講演) 大阪歴史博物館

SASAKI Ken'ich, Political Organization in Kofun-age Japan, Meiji University-USC Faculty and Graduate Student Research Exchange, December 6, 2013, University of Southern California, California, USA

福永伸哉、世界の墳丘墓と前方後円墳、考古学研究会関西例会 30 周年記念シンポジウム、2013 年 11 月 30 日 (招待講演) 大阪歴史博物館

HASHIMOTO Tatsuya, Political Power and the Production and Distribution of Kofun Period Armor, New Perspectives on the Archaeology of State Formation in Japan, November 1, 2013, Boston University, Boston, USA

SASAKI Ken'ich, Nature of Kofun Period Archaeology from a World Perspective, Special Workshop on Japanese Archaeology: New Perspectives on the Archaeology of State Formation in Japan, November 1, 2013, Boston University, Boston, USA

FUKUNAGA Shin'ya, Keyhole-Shaped Tombs and the State Formation of Japan, Special Workshop on Japanese Archaeology: New Perspectives on the Archaeology of State Formation in Japan, October 31, 2013, Harvard University Asia Center, Massachusetts, U.S.A

SEIKE Akira, Changes in Systems of Chiefly Succession during the Kofun Period, Special Workshop on Japanese Archaeology: New Perspectives on the Archaeology of

State Formation in Japan, October 31, 2013, Harvard University Asia Center, Massachusetts, USA

NAKAKUBO Tatsuo, Pottery of the Kofun Period: Resonance, Innovation, and Core-Periphery Relations, Special Workshop on Japanese Archaeology: New Perspectives on the Archaeology of State Formation in Japan, October 31, 2013, Harvard University, Massachusetts, USA

SASAKI Ken'ich, Local Elites and Foreign Interactions in Kofun-period Japan, Association for Asian Studies, March 23, 2013, San Diego

中久保辰夫、河内地域、古代学研究会 2012 年度拡大例会シンポジウム「集落から探る古墳時代中期の地域社会 渡来文化の受容と手工業生産」, 2012 年 12 月 9 日 (招待講演) 大阪歴史博物館

SASAKI Ken'ich, Archaeological Investigations into the Omuro Cairn and Mound Group (A.D. 5th-7th c.) in the Central Highlands of Japan, Meiji University-USC Faculty and Graduate Student Research Exchange, November 29, 2012, University of Southern California, California, USA

菊地芳朗、鉄製武器からみた漢と倭の交流、漢代西域考古与漢文化国際学術研討会、2012 年 10 月 16 日 (招待講演) 中国ウルムチ市新疆翼竜大酒店

高橋照彦・中久保辰夫、考古学からみた王宮・王陵と地域社会、日本史研究会古代史部会、2012 年 9 月 17 日 (招待講演) 機関誌会館

FUKUNAGA Shin'ya, A brief introduction to the Kofun period: Social change during the transition from a hunter-gatherer society to the archaic state in Japan, Workshop on Current Research on the Archaeology of the Kofun period in an international perspective, July 17, 2012, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, Nowrich, UK.

① SASAKI Ken'ich, State formation in Japan: a view from the eastern periphery, Workshop on Current Research on the Archaeology of the Kofun period in an international perspective, July 17, 2012, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, Nowrich, UK

② NAKAKUBO Tatsuo, Two types of intercultural interactions in the development of the Yamato government, Workshop on Current Research on the Archaeology of the Kofun period in an international perspective, UK, July 17, 2012, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, Nowrich, UK

③ 菊地芳朗、古墳分布北縁地域における大型

石棺の調査、日本考古学協会第 78 回総会、2012 年 5 月 27 日、立正大学大崎キャンパス
②④ SASAKI, Ken'ich, Autonomous Role of Peripheral Politics in the Process of State Formation in Japan. Society for American Archaeology, 76th Meeting, April 1, 2012, Sacramento, California, USA.
②⑤ 佐々木憲一、日本考古学の方法論、考古学研究会第 58 回研究集会、2012 年 4 月 21 日(招待講演)、岡山大学
②⑥ 中久保辰夫、古墳時代前半期における摂津と播磨、第 13 回播磨考古学研究集会、2012 年 2 月 5 日(招待講演)、姫路市教育会館
②⑦ 福永伸哉、国家の形成と前方後円墳の時代、百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進国際シンポジウム(招待講演)、2012 年 1 月 15 日、堺市産業振興センター
②⑧ 橋本達也、金銅装眉庇付冑と古墳時代中期、第 79 回歴博フォーラム 祇園大塚山古墳と 5 世紀という時代、2011 年 11 月 5 日(招待講演)、国立歴史民俗博物館
②⑨ 清家 章、和歌山県沿岸部の古人骨、海洋考古学会第 2 回研究会、2011 年 8 月 28 日、和歌山市立博物館

〔図書〕(計 18 件)

福永伸哉・中久保辰夫 他、大阪大学大学院文学研究科、21 世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信、平成 23 年度～26 年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書、2015、198

清家章、学生社、卑弥呼と女性首長、2015、237

高橋照彦・中久保辰夫 他、大阪大学大学院文学研究科、野中古墳と「倭の五王」の時代』2014、96

橋本達也・鈴木一有、大阪大学大学院文学研究科、古墳時代甲冑集成、2014、181

菊地芳朗、大阪大学大学院文学研究科、古墳時代環頭大刀集成、2014、59

福永伸哉、大阪大学文学研究科、三角縁神獸鏡および同伴銅鏡集成、2013、188

小林三郎・佐々木憲一 他、六一書房、古墳から寺院へ、2013、206

高橋照彦 他、大阪大学大学院文学研究科考古学研究室、日本古墳文化研究の国際化に向けて 日欧ワークショップおよびフィールド調査による古墳文化研究の国際化推進事業、2012、69

菊地芳朗 他、福島大学行政政策学類考古学研究室、『東北南部における古墳時代石棺の調査』2012、62

高橋照彦 他、学生社、天皇陵古墳を考える、2012、pp.219-272

福永伸哉 他、学生社、古代の鏡と東アジア、2011、pp.5-34、135-195

〔その他〕

ホームページ等

長尾山古墳発掘調査

http://www.let.osaka-u.ac.jp/kouko/hpna_gaoyama2011/index2011.htm

待兼山古墳群発掘調査 2012

http://www.let.osaka-u.ac.jp/kouko/machi_kaneyama2012/

セインズベリー日本藝術研究所、大英博物館と共催で "Kofun Workshop" を開催

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kouko/KofunWorkshop2012.htm>

古墳の発掘調査から日本古代史の実像に迫る

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kouko/nonaka/>

Ancient Japan revealed through Kofun
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kouko/nonaka/en/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福永 伸哉 (FUKUNAGA SHINYA)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：50189958

(2) 研究分担者

高橋 照彦 (TAKAHASHI TERUHIKO)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：10249906

菊地 芳朗 (KIKUCHI YOSHIO)

福島大学・行政政策学類・教授

研究者番号：10375347

橋本 達也 (HASHIMOTO TATSUYA)

鹿児島大学・総合研究博物館・准教授

研究者番号：20274269

佐々木 憲一 (SASAKI KENICHI)

明治大学・文学部・教授

研究者番号：20318661

中久保 辰夫 (NAKAKUBO TATSUO)

大阪大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：30609483

清家 章 (SEIKE AKIRA)

高知大学・人文社会科学部門・教授

研究者番号：40303995

杉井 健 (SUGII TAKESHI)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：90263178

(3) 連携研究者

なし